

『語文』の中の戦争と平和 —中国義務教育語文課程学習目標の視点から—

《语文》当中的战争与和平 —从中国义务教育语文课程学习目标的角 度—

西川真子
Mako NISHIKAWA

はじめに

- I 「戦争と平和」を説明する視点
 - II 「国の恥を忘れるな」という主題
- おわりに

はじめに

中国国務院教育部が定める「義務教育語文課程標準（2011年度版）」は、中国の義務教育課程における語文教育の目的の一つとして「中国語の言葉と文の習得と知識素養の基礎を築くとともに、正しい世界観・人生観・価値観を形成し、中華民族の優秀な文化と革命の伝統を継承すること」¹と規定する。この目的を達成するために、語文科目の教科書は如何なる内容を備えているのか。

中国の義務教育課程は小学課程六年と中学課程三年、合計九年間と定められている。この九年間に使用する教科書は全国小中学校教材審定委員会の審査に合格したものの中から選ばれるが、語文科目については全国の過半数以上の学校が中国人民教育出版社刊『義務教育課程標準実験教科書 語文』（以下、『語文』）²を採用している。語文科目の教科書の形態は、人民教育出版社

刊『語文』をはじめ、いずれも各学年二冊ずつ、義務教育課程全九年間に合計十八冊から構成されている。この中で例えば人民教育出版社小学課程用の教科書『語文』は各冊ともそれぞれ八つの単元に分かれ、各単元には四つ程度の教材が収められている。よって『語文』には一冊ごとに三十課余りの教材が収められ、小学課程六年間に合計約三百六十課の教材を学習することになる。

筆者はこれまで『語文』の教材について様々な角度から分析を重ねてきたが、その中で義務教育語文課程の目標に数えられる「正しい世界観、人生観、価値観の形成」を達成する為に教科書にはどのような教材が用意されているのかという課題を考察対象の一つとしている。拙稿「戦争と子ども—中国の語文教科書から」³はこの目的意識に基づく論考で、同稿における考察によって以下の点を明らかにした。すなわち『語文』には中国内外の戦争体験に基づく教材が載録されているが、それらは嘗ての侵略戦争に対して中国が全面的に抵抗したこと、その結果として現在の中国が存在することを理解する目的で編集されていることが分かった。さらに現在使用されている『語文』では、今日既に中国が当事者となる戦争の時代は過去のものとなったが、世界の中で軍事紛争が続いている国家地域、中でも一九九〇年代以降の中東地域を対象とする国連の平和維持活動に積極的に参与するという中国の立場を説明する教材が載録されていることを指摘した。

本稿ではこれらの結果を踏まえ、『語文』の教材の中で、中国近現代史において無視できない戦争体験を如何に説明し、その戦争に関わった人間をどのように描いているのか考察したい。義務教育語文課程の中で戦争を主題とする教材は、国家にとっての戦争が持つ意味と戦争に直面する国民の生命に対する考え方を示し、国民の世界観、人生観、価値観の形成を左右する。『語文』所収の教材として近現代中国の歴史を左右した戦争体験を学習することは国民の世界観、人生観、価値観の形成とどのように結びつくのか併せて考えたい。

I 戦争を説明する視点

中国人民教育出版社刊『語文』には、中国近現代における戦争体験を主題とする教材が様々な形で載録されている。現在小学校で使用されている『語文』全十二冊の中で、戦争を主題とする最初の教材は、『語文』一年級下冊第六単元第23課「王二小」（王二小）である。⁴「王二小」は抗日戦争の最中、八路軍の遊撃作戦に協力し日本兵に殺害された十三歳の少年王二小を主人公に据える。「王二小」を含む『語文』一年級下冊第六単元の学習目標は、今日中国の子どもたちが享受する幸福な日常は先人たちの献身の上に得られたと理解する点にある。前稿「戦争と子ども—中国の語文教科書から」で述べたように、同単元には四つの教材が収められているが、「王二小」を含む前半の二課は毛沢東、革命運動、中国共産党並びに八路軍をキーワードに近現代中国の苦難の歴史を主題とする。これに対して後半の二課は前半二課で示した先人の貢献の上に、現在の中国の豊かで安全な国土に暮らす子どもの姿を対比させている。すなわち小学校語文課程全六年間の中で戦争が主題となる最初の教材は、小学一年後半という早い段階で登場し、今日の幸福な子どもの生活は抗日戦争期八路軍兵士の遊撃作戦に協力し戦死した子どもの犠牲の上にあると説明する形になっている。

『語文』の中で、戦争の中を生きる人間の問題に焦点を絞り集中的に考える教材は、四年級下冊第四単元「戦争と平和」に配されている。同単元には、現代中国の小学生に対し戦争に直面した同世代の子どもたちの行動を示す四つの教材収められている。これらの教材は「子ども」という観点から集められているため、各教材の中で主人公たちが直面する戦争の状況は互いに異なるが、各教材からはそれぞれ以下のような特色が読み取れる。

まず同単元の中の最初の教材である第13課「ナイチンゲールの歌声」（夜鶯の歌声）は第二次世界大戦中、ソ連領内の農村に軍を進めてきたドイツ軍に抵抗し、鳥の鳴き声をまねて合図を送り、地元の遊撃部隊に協力するソ連の少年を主人公とする。つづく第14課「小さな英雄雨来」（小英雄雨来）は抗日戦争中、八路軍の根拠地となった晋察冀辺区内に暮らす雨来少年が機転を利かせ危険を冒して協力する姿を描く。これは、第13課「ナイチンゲール

の歌声」がソ連領内でドイツ軍に抵抗する村の少年を主人公とするのにつき、祖国を侵略する敵軍に抵抗するために地元の遊撃部隊に協力する少年の知恵と勇気を讃える点で共通点をもつ。「小さな英雄雨来」はまた、一年級下冊所収の「王二小」とも同型の物語であり、王二小と雨来はいずれも抗日戦争期八路軍の遊撃戦に関わることで生命の危機に晒される。だが王二小少年は敵兵と戦った末に殺害されるのに対し、雨来は自力で生命の危機を切り抜ける。四年次対象の教材は一年次よりもさらに能動的に自分の判断力で活路を切り開く子どもを模範例として取り上げていると言える。

これらの教材の流れをたどると、第13課「ナイチンゲールの歌声」の中でソ連の少年がドイツ軍の侵略行為と戦う物語が配されていることは、「王二小」並びに「小さな英雄雨来」の主人公のように、中国の少年たちが抗日戦争期に日本の侵略行為に抵抗した姿に対し国家地域を超えた普遍性を与え、戦争に直面した子どもが如何なる行動を取るべきか、その模範を示すという役割を果たしている。

一方、次の第15課「ある中国の子どもの声」（一个中国孩子的呼声）は一九九四年にイラク・クウェートの国境地域で国連平和維持軍の軍事監視官として活動していた父親が戦死し、その遺児が当時の国連事務総長に宛てて平和を訴えた手紙を教材とする。

さらにこれを受けて第16課「みんなに春が来るように」（和我们一样享受春天）は中国の児童文学者高洪波の作品を原作として、今も政情不安がつづく中東地域の子どものために安全な生活空間と教育環境を取り戻すことを提唱する。高洪波は、政治的緊張がつづく中東を視察した際の衝撃により、この作品を生み出したという。⁵「みんなに春が来るように」は全五節からなり、各節ごとに何故地球上から戦争がなくなる原因は何か、自然に恵まれた生活環境が戦場と化すのは何故か、子どもが遊ぶ緑の大地を地雷原に変えるものは何かという問いを発し、子どもたちから教育の機会を奪ってはならないという言葉で締めくくられる。

『語文』四年級下冊第四単元には上記のような教材が載録されているが、単元全体の構成を再確認すると、以下の特色が見て取れる。

第一に同単元の教材は、第二次世界大戦を舞台とする第13課「ナイチンゲールの歌声」と第14課「小さな英雄雨来」、そして一九九〇年代以降の中東戦争を背景とする第15課「ある中国の子どもの声」と第16課「みんなに春が来るように」に大別できる。前半の第13課と第14課は第二次世界大戦の中で敵の侵略戦争に知恵と勇気をもって抵抗する少年を讃えるという共通点を持つが、後半の第15課並びに第16課はいずれも、中国は既に戦争の時代を脱し平和を確立したと言う立場から、世界各地で今なお戦火が止まない地域に関心を持ち国際平和に貢献する意識を育むことに力点が置かれている。

第二に、同単元所収の四つの教材はいずれも戦争を主題とするが、戦争の犠牲者について直接言及が有るのは第15課「ある中国の子どもの声」だけである。『語文』においては上述したように一年級下冊第23課「王二小」の主人公が抗日戦争に協力し敵軍の攻撃を受けて戦死する。「小さな英雄雨来」の主人公は「王二小」と同じ状況に置かれながら敵兵に生命を奪われることなく自力で窮地を免れる。よって『語文』四年級下冊第四単元の中で戦争の犠牲者となる登場人物は、「ある中国の子どもの声」の中に登場し、一九九〇年代に中東で平和維持活動を遂行中に亡くなった父親のみとなり、『語文』小学課程全十二冊の中に描かれる戦争の犠牲者としては、「王二小」に次ぐ二例目となる。

このように『語文』四年級下冊第四単元所収の教材は中国の戦争体験に基づく教材と、中国以外の国家地域を舞台とする戦争に基づく教材が、「子ども」をキーワードとして相関関係を持つように編集されている。『語文』の教師用教学参考書である『語文 教師教学用書』（以下、『教師教学用書』）によればこの単元の学習目的は第一に第二次世界大戦中の子どもたちの行動と戦争の恐怖を理解し、平和を希求する感情を育むことにある。⁶ よって同単元は、嘗て自国が敵国による侵略戦争に晒された時代には子どもも危険を顧みず抵抗運動に協力した事例を知り、翻って今なお戦争がつづく国家地域に関心を持ち、世界平和の実現に対して積極的に関与しなければならないことを示唆する。特に第15課「ある中国の子どもの声」は、父親が他国の軍事紛争を解決するために国連の平和維持活動に従事する最中に死亡したため、国連

事務総長に対して世界平和をうったえる中国の子どもを中心に据えている。

以上、『語文』四年級下冊第四単元では「戦争と平和」と言う主題を子どもの視点を通して提示されていることが確認できた。これらの教材には、たとえ子どもであろうと戦争と無関係に生きることは出来ないという主張が強調されている。とりわけ自国に対する侵略行為に対し死力を尽くして抵抗する子どもを描いた教材には、自国への侵略行為に抵抗しつづけてきた、中国近現代の歴史が投影されている。

だが、子どもも避けて通ることは許されない戦争とは何か。「王二小」並びに「小さな英雄雨来」に描かれた抗日戦争をはじめ、十九世紀半ば以降中国は何故他国との戦争を体験しなければならなかったのか、さらに他国の侵略に抵抗した先人たちは如何なる犠牲を払ったのか。『語文』四年級下冊まで進められてきた学習を受けて、同五年級上冊には近現代史の時間軸に沿って中国の戦争体験とその後の復興を知る為の課題が用意されている。この課題について次章で考察したい。

Ⅱ 「国の恥を忘れるな」という主題

『語文』の中では四年級下冊に至るまで戦争に関わる教材には、自国に対する軍事侵略には子どもも抵抗しなければならないという主張が示されているが、子どもも避けて通ることができなかった戦争とは何だったのか。この問いに答えるために、『語文』五年級上冊第七単元は、十九世紀半ばから今日に至るまで中国がたどった戦争の苦難を説く教材を系統的に載録する。

『語文』五年級上冊第七単元は「国の恥を忘れるな」（勿忘国恥）を主題とし、第21課「円明園の破壊」（圆明园的毁灭）、第22課「狼牙山の五壮士」（狼牙山五壮士）、第23課「忘れ難い授業」（难忘的一课）、第24課「最後の一分間」（最后一分钟）の合計四課が集められている。『教師教学用書』はこの単元について「これらのテキストの題材、体裁は異なるが、行間には強烈な民族精神と愛国の情熱が満ち溢れており、語文教学の中で中国近現代史教育と愛国主義教育を行うためのこの上ない拠り所である」⁷とする。よって以下に、これら各課の内容を確かめたい。

第21課「円明園の破壊」（圆明园的毁灭）は題名が示すとおり、清朝第五代雍正帝（一六七八—一七三五、在位一七二二—一七三五）によって北京の西北郊外に建造され、清朝歴代の皇帝に名園として愛された、円明園の往時の景観を偲びつつ、一八六〇年に英仏両軍によって破壊された同園の歴史を叙述する。⁸ 本文は五つの段落から構成され、第一段落は全体の導入部、第二段落には円明園が元来清朝皇帝の離宮として建造された由来を述べる。第三段落は、嘗て円明園に並び建っていた壮麗な宮殿と広大な庭園について回想し、第四段落は同園に修められていた貴重な美術品のありさまについて叙述する。本文の後ろに付された学習課題には「感情を込めて本文を朗読し、第三段落と第四段落を暗誦すること」⁹と指示されており、円明園についてこの二つの段落に書かれている知識内容は国民が一致して共有すべきものと見做されていると言える。暗誦課題とされる第三段落と第四段落は合わせて13行、約370字となっており、その中には以下の部分を含む。

円明園の中には光り輝く御殿や巧みな技を尽くした小亭楼閣が散在していた。（中略）

園内には民族建築のみならず、西洋の景観が含まれる。園内を巡り歩くと、世界全土を漫遊し、中国内外の風景名勝を隔々まで眺めわたし、まるで幻想の世界に身を置いたかのようなようであった。

円明園は建築が雄大であるだけでなく、貴重な歴史的文化的文化財を収蔵していた。その中には先秦時代の青銅器から、唐、宋、元、明、清と歴代名手の書画や珍しい宝物まで含まれた。そのため円明園は当時世界最大の博物館であり芸術の殿堂でもあったのだ。¹⁰

既に消滅した円明園の様相は、今や言葉で表現し記憶することしかできない。同課は円明園の概要と歴史を記憶するための教材であると言ってよい。『語文』には、円明園の他にも、万里の長城、頤和園、秦兵馬俑等世界遺産に指定されている歴史的建造物の概要を叙述する教材が載録されている。¹¹ 円明園はこれらに準ずる存在と評価され、尚且つ破壊され既に存在しない文物

であるが故に、語文科目の教材として暗誦し国民が共有すべき財産と考えられている。

本文最後の第五段落は、嘗て世界最大の美術の宝庫だった円明園が破壊された経緯を以下のように説明する。

一八六〇年十月六日、英仏連合軍は北京に侵入し、円明園になだれ込んだ。彼らは凡そ園内で持ち運べるものは全て持ち去り、重い物は荷車や牛馬で運び、どうやっても動かせない物は恣に破壊し、打ち潰した。破壊行為の証拠を消すために、十月十八日と十九日、三千人余りの侵略者が命令を受けて園内に放火した。大火は三日間燃えつづけ、煙雲が北京の街を覆った。我が国の園林芸術の宝庫、建築芸術の精華はこのようにして一片の灰燼に帰した。¹²

この教材の学習目標は本文を暗唱し清朝庭園文化の結晶ともされた円明園の嘗ての輝きと破壊を受けた経緯を記憶することにある。『教師教学用書』には、授業前に円明園に関する文章、図版、視聴覚資料を集め、児童が円明園についてさらに多く、視覚的に理解するよう働きかけること、教師が文字資料を補って学生が教科書本文を理解するのを助け、関連する内容を参考資料として提供することを提案している。¹³

一八六〇年の円明園に対する破壊行為の後も、中国では列強各国との間に生じた軍事紛争がつづく。中でも日本に関しては、一八九四年日清戦争、一九三一年満州事変、さらに一九三七年に勃発した盧溝橋事件は日中両国の全面戦争を引き起こし、日本の対中軍事侵略は拡大の一途をたどった。二十世紀の中国を振り返る時、この状況を見捨てることは出来ない。そのため『語文』の教材には日本の侵略行為に対して中国共産党と中国民衆が如何に抵抗したかを記す教材が複数回載録されている。「国の恥を忘れない」を主題とする『語文』五年級上冊第七単元にも当然抗日戦争を主題とする教材が載録されており、第22課「狼牙山の五人の壮士」（狼牙山五壮士）は、抗日戦争における八路軍の活動を描く教材である。同課の原作者は中国共産党員で対

日戦争中は『晋察冀日報』で記者として活動した作家沈重（1915-1986）である。この物語は一九四一年抗日戦争の激戦地となった晋察冀根拠地¹⁴で八路軍の五人の兵士が敢行した作戦行動としてよく知られている。八路軍については、既に『語文』一年級下冊第六単元第23課「王二小」（王二小）、同四年級下冊第四単元第14課「小さな英雄雨来」（小英雄雨来）に登場している。尚且つこの二つの教材は、いずれも晋察冀根拠地内の涞源县と関係が深い教材となっている。「狼牙山の五人の壮士」もまた、「王二小」と「小さな英雄雨来」につづく晋察冀根拠地における八路軍の行動に焦点を当てた教材で、同地を舞台とした抗日運動を記録する教材を総括する意味を持つ。

「王二小」と「小さな英雄雨来」は抗日戦争に抗日運動の根拠地で児童団員として八路軍に協力した子どもを中心に据えた教材であるが、「狼牙山の五人の壮士」は、抗日戦争の主力となった八路軍の戦士を主人公とする。「狼牙山の五人の壮士」に描かれる五人の八路軍兵士は、一九四一年九月二十五日、晋察冀根拠地内の易県狼牙山地区で日本軍がおこなった掃討作戦から八路軍の主力部隊と村民を避難させるために、日本軍を狼牙山の絶壁に誘導し味方の危機を救った。任務を遂行した後、五人の兵士は日本軍の注意をそらすために本体に合流するのを断念し、日本軍を味方の一団とは反対の方向に誘導、最後は絶壁の上から飛び降りた。その結果三名の兵士は命を落としたが、残る二人は一命をとりとめた。彼らは建国後も長く「狼牙山の五壮士」と称賛された。

『教師教学用書』はこの教材を載録した意図として、「英雄たちの壮挙を表現した文章から、児童が五人の壮士の英雄の気概を感じ取り、民族意識を高め、愛国の熱情を掻き立てること」¹⁵を掲げている。同課本文のクライマックスは五人の兵士が断崖絶壁の上から飛び降りる場面だが、この部分に対して『教師教学用書』は「感情をこめて朗読すること。五人の壮士が勇敢に断崖から飛び降りる箇所を暗誦すること」¹⁶とする。また併せて決死の作戦を敢行した五人の兵士に思いを馳せること、授業前に抗日戦争に関わる歴史資料を探し、授業後には抗日戦争の英雄に関する図版や文書を収集すること、さらに抗日戦争を題材とする小説として『鉄道遊撃隊』『小兵張嘎』を読み、映

画版の『狼牙山五壮士』を授業の中で鑑賞することも補足し提案している。¹⁷

前述したように『語文』小学課程全十二冊の中で抗日戦争を主題とする「王二小」「小さな英雄雨來」「狼牙山の五人の壮士」は、いずれも晋察冀根拠地を舞台に八路軍兵士と地元の村民を中心に据えた故事が集められている。その背景には『語文』の中で抗日戦争に関わる教材を如何に位置付けるか、時代の変遷とともに新たな課題が生じているという事情が有る。すなわち現在中国の義務教育語文課程は、国内外の著名な文学作品、歴史地理、民俗、科学的思考、並びに自然環境への関心を高めるための読み物に加え、中国共産党の歴史と正統性を説く教材等多様な要素が盛り込まれ、抗日戦争を主題とする教材に配分できる割合は限られている。これに対応するために抗日戦争に関連する教材は、多様な要素の中から晋察冀根拠地を舞台とした八路軍と地元民衆の事績を叙述する文章に的を絞って選択がなされている。

現在既に中華人民共和国の建国から七十年近くが経過し、中国共産党成立初期の事績、あるいは語文科目の教科書に長年掲載されてきた伝統的な教材が徐々に削減されつつある。その一例として、2000年代に入り、嘗ては教科書に載録されていた革命指導者で中国人民解放軍総司令をつとめ、中華人民共和国成立後は国家副主席等の要職を歴任した朱徳¹⁸を主題とする教材が削除された際には教育関係者をはじめ様々な立場から議論が生じた。中国共産党の指導者として現在『語文』に掲載されているのは、毛沢東が一年級下冊に一課と五年級上冊第八単元「毛沢東」内に四課の教材が載録されている他は、周恩来、鄧小平が各三課、李大釗、宋慶齡が各一課となっている。中国共産党創立以来の歴史とその指導者について知ることは義務教育語文課程の中で主要な学習課題とされているが、過去の歴史を知るための教材の取り上げ方は、語文科目の教科書を編集する上で一つの論点となっており、抗日戦争に関わる教材が晋察冀根拠地を舞台とする八路軍の事績を描くものに集約されていることとも関連をもつ。

小学五年の学習者にとって、抗日戦争が中国の戦勝によって終結したことは学校教育をはじめ様々な機会に説明を受けて既に習得済みの事項となっている。よって『語文』の中で抗日戦争の結末は自国の勝利を以て説明されて

おり、日本の敗戦を殊更に強調する教材は認められない。『語文』五年級上冊第七單元の中でも、抗日戦争の結果については第22課「狼牙山の五人の壮士」と第23課「忘れ難い授業」の間に挟まれた短い説明文の中で「一九四五年台湾の“光復”後」という言葉で表されているだけである。この短いフレーズにつづく第23課「忘れ難い授業」（难忘的一课）は、抗日戦争終結後の台湾が舞台となる。中華人民共和国の政権を担う中国共産党にとって、台湾に関わる問題は特に重要度が高いことに贅言は要さない。そのため『語文』には台湾を主題とする教材が合計四課取り上げられている。¹⁹ その中で五年級上冊第23課「忘れ難い一課」は、二年級上冊第12課「雪を観る」（看雪）、二年級下冊第9課「日月潭」（日月潭）、四年級上冊第22課「海峡を越える生命の橋」（跨越海峡的生命桥）の後を受け、四課中の最後に配置されている。これら四課の中で「雪を観る」は北京との対比で台湾の地理上の位置を知り、「日月潭」は台湾最大の湖の概要を知ること力点が置かれている。次いで「海峡を越える生命の橋」は台湾花蓮市の青年が白血病を患う杭州在住の中国人青年に骨髓を提供するという話が展開する。ここには中国と台湾の間の政治問題は双方の主張が対立し未だ解決を見みないものの、人命救助に関わる局面では若い世代が新たな関係を築き得るという可能性が示されている。

これらを受けて登場する「忘れ難い授業」は、台湾の日本統治が終結して間もない頃、海運会社の船員として働いていた「わたし」が台湾の高雄に赴いた際の体験を語るという設定になっている。「わたし」は高雄港に到着後、偶然通りがかった小学校で年若い台湾人教師が「国語」（標準中国語）で授業をおこなっているのを眼にした。この台湾人教師は生まれた時から日本語教育を受け、たどたどしく不慣れな国語で「わたしは中国人です。わたしは中国を愛しています」（我是中国人、我爱中国）と教科書を読み上げた。これを聞いた「わたし」は思わず教室に歩み入り、台湾人教師につづき児童たちと一緒に「わたしは中国人です。わたしは中国を愛します」と唱和した。「わたし」は台湾人教師と子どもたちに迎え入れられ、学校の中の講堂に案内された。台湾人教師の話では嘗てこの講堂の壁には日本人の肖像画が掛かっていたが、今はそれらに代わって孔子、諸葛亮、鄭成功、孫中山を描いた絵がか

けられていた。「わたし」は台湾人教師の手を握り、「わたしは中国人です。わたしは中国を愛しています」という言葉以上に自分の感情を表せる言葉はないと確信する場面で本文は終わる。同課は略読教材で学習目標には感情をこめて本文を朗読することと設定されている。²⁰ すなわち授業で同課を朗読すれば本文中に三回繰り返される「わたしは中国人です。わたしは中国を愛します」のフレーズを台湾の「光復」と結び付けて口頭で表現することになる。

「忘れ難い授業」は以上のような内容を持つが、これを五年級上冊「国の恥を忘れるな」所収の一課として読むと、第21課「円明園の破壊」が清朝皇帝の離宮と芸術品を英仏連合軍が徹底的に破壊略奪したのに対し中国は何ら抵抗できず、ただ昔日の円明園の栄華と屈辱の記憶を継承するしかないことを示し、第22課「狼牙山の五人の壮士」は日本の軍事侵略に対して中国の民衆は多大な犠牲を払いつつも中国共産党の領導の下に徹底抗戦を貫いたことを語るのに対し、「忘れ難い一課」は抗日戦争終結とともに台湾は日本による統治を脱し、覚えない足取りながら次の世代が歩み出したことを示している。一方、同課を『語文』の中で台湾を主題とする教材という角度からみると、同課は抗日戦争の終結を以て台湾は中国に返還されたという事実を示し、嘗て日本統治下におかれた民衆は「中国人」になったという点に注意が注がれる構成になっている。

『語文』五年級上冊第七単元「国の恥を忘れない」の最後の教材第24課「最後の一分間」(最后的一分钟)は、李小雨(1951-2015)²¹ 原作の現代詩を基に、一九九七年七月一日午前零時、香港がイギリスの支配に終止符を打ち中国に返還される瞬間を描いた教材である。

中国は一九四〇年に始まった阿片戦争敗北後、一九四二年の南京条約によりイギリスに対する香港割譲を余儀なくされた。さらにアロー戦争後の一八六〇年に締結された北京条約によって九龍半島の先端部もイギリスに対して割譲され、次いで一八九八年の新界租借条約によって、イギリスは清朝から現在香港特別行政区の主要部分に当たり「新界」と呼ばれる地域と香港島周辺の島嶼部を九十九年間にわたって租借する権利を得た。²² この権利は中華

人民共和国建国後も効力を失わず、中国の政権を担う中国共産党にとって香港返還は外交上の最重要課題となった。一九八四年、中英両国は共同声明を發表し一九九七年六月三十日にイギリスの香港領有権が失効するのを機に、香港はイギリスから中国に返還されることを明らかにした。声明發表後、中英両国間で香港返還の手続きと今後の体制について交渉が始まった。交渉の過程には難題が山積し、香港が中国に返還された後の香港の行政運営と香港市民の権利保護については特に複雑な課題を抱えていたが、条約に従って一九九七年七月一日午前零時、香港は中国に復歸した。

香港返還は中国が他国の侵略を受けた過去を克服し最後のくびきを払う、象徴的な出来事と位置付けられた。「最後の一分間」は、香港返還をイギリスから引き渡された香港の手を中国が固く握り締める瞬間に凝集した作品で、その冒頭は次の詩句で始まる。

午前零時。香港、
 お前の手を握り締め、
 ついにやって来た最後の一分間の歩みに耳を傾けよう。
 一步ずつに近づく足音に耳を澄ませ、
 すべての中国人の胸の高鳴りと問いかけを聞き届けるのだ。
 午夜。香港、
 让我拉住你的手，
 倾听最后一分钟的风雨归程。
 听你越走越近的脚步，
 听所有中国人的心跳和叩问。²³

『教師教学用書』は同課の学習目標を「感情を込めて本文を朗読すること」「詩歌の内容を理解し、詩歌が表す思想感情を実感し、祖国を熱愛する情感をかき立てること」²⁴と指示している。すなわち学習者には本文の朗読を通じて香港の歴史を振り返り、先人たちが香港に対して抱いてきた感情と香港返還の喜びを共有することを期待されている。

「最後の一分間」には一つの独立した教材としての役割に加え、その本文中には『語文』五年級上册第七单元全体の構成に関わる意味が与えられている。「最後の一分間」の第三節には次の4行が含まれており、その中には「国の恥」を象徴する語句が用いられている。

わたしは見た、
虎門上空にたなびく砲煙の最後の一筋は、
百年後の最後の一分間に、
終に散り去ったのを；
我看见，
虎门上空的最后一缕硝烟，
在百年后的最后一分钟
终于散尽；²⁵

ここに登場する「虎門」とは、広東省を流れる珠江の河口にある集落で、清朝政府は同地に珠江を航行して広州市に出入りする船舶を監視するための役所を設けていた。一八三九年阿片厳禁を唱える林則徐はこの虎門でイギリス船によって持ち込まれた阿片を焼き捨てた。これを機に翌一八四〇年に阿片戦争が始まったが、戦争中も林則徐が率いる清軍は虎門の砲台からイギリス艦隊を爆撃しこの一帯は中英両国の激戦地となった。現在虎門には阿片戦争人民抗英記念碑が建立され、中国にとって阿片戦争を象徴する場所となっている。この虎門の地名が用いられていることにより、『語文』五年級上册第七单元は単独では載録されていない阿片戦争を「最後の一分間」の中で想起させる構成になっている。

阿片戦争は、中国近代の外交史上最初の打撃となり、その後の衰退を招く契機となった。この点を考えれば「国の恥」を記憶する事項として同单元の最初には阿片戦争に関わる教材が用いられても不思議はない。しかし单元の最初に阿片戦争を置いた場合、二つ目に位置する「円明園の破壊」との類似性が高くなる。円明園の破壊は、第二次阿片戦争ともいわれるアロー号戦争

が発端となっている。当時英仏両国はアジアへの進出を加速させようとしていたが、清朝政府は長年の朝貢体制を改めようとしなかった。これに不満を募らせた英仏両国は連合軍を北京に入城させて、円明園の破壊するに至ったのだった。また、清朝にとって阿片戦争は、清朝との間の貿易不均衡を根本的原因とする、イギリスとの間の戦争であったのに対し、円明園の破壊行為はイギリスとフランスの二か国が清朝を代表する庭園建築を破壊する侵略戦争であった。『語文』五年級第七単元では、十九世紀以降列強諸国が中国に対しておこなった軍事侵略を説明するために英仏二か国が関わった「円明園の破壊」を巻頭に据えたとと言える。

以上のように、「国の恥を忘れない」を主題とする五年級上冊第七単元は、一八六〇年に引き起こされた円明園の破壊に始まり、第二、第三の教材に日本の中国侵略を記憶するための教材を配し、「最後の一分間」によって阿片戦争以来イギリスの領有下におかれた香港の中国復帰を叙述して締めくくられている。

おわりに

本稿では、『語文』所収の教材において中国が近現代史の中で直面した戦争と、その戦火の中を生きた人間がどのように描かれているのか考察を進めてきた。その結果、第一に四年級下冊より低学年の課程では、嘗て他国による侵略戦争に直面した子どもたちが如何なる犠牲を払い抵抗運動に関わったのか、先人の貢献を知るという視点から教材が載録されていることが分かった。次いで現在中国の子どもたちは平和を享受する社会に生活するが、地球上には未だ戦火が止まない地域が存在し、中国はこれらの地域に平和が実現し危険に晒されている子どもたちを救済するために国連の平和維持活動に協力すると説明する教材が載録されていることを確かめた。四年級下冊第四単元とそれ以下の教材では自国に対する侵略戦争には子どもも抵抗しなければならないという主張が全面に押し出されていたが、何故中国への侵略戦争は引き起こされたのか。この問いに対し、五年級上冊第七単元は「国の恥を忘れるな」という主題の下に中国が阿片戦争から香港返還に至る過程の中で英

仏日三カ国から受けた武力侵略を例に近現代史の流れに沿って中国が被った軍事侵略とその後の復興を説明するという構成になっている。四年級下册第四単元と五年級上册第七単元の教材の主題はそれぞれ異なるが、各単元とも前半の2課では嘗て他国の軍事侵略に苦しんだ記憶を振り返り、後半の2課を用いて中国が既に他国の侵略を克服し平和国家の建設を目指すと言う立場を表明している。つまり『語文』の中には中国にとって過去の「国の恥」を語る教材が取り上げられているが、単元毎の結論は戦争の時代を克服した現在の中国を肯定する立場で締めくくるという形になっている。

以上のような特色を持つ教科書を用い戦争と平和について学習することは、「語文課程標準（2011年版）」が目標とする「正しい世界観、人生観、価値観の形成」とどのように結びつくのか。本稿が資料とした四年級下册第四単元並びに五年級上册第七単元を通読すると、本文には自国への侵略行為に対する義憤、抵抗運動に投じる勇気と敵兵の攻撃に対する臨機応変な行動力、先人への感謝、平和を希求する自主性が説かれ、過去の歴史に対する負の感情を正の活力に転換する方向に編集されていることが読み取れる。

「義務教育語文課程標準」が定める「正しい世界観、人生観、価値観」とは言うまでもなく国家が国民に期待する世界観、人生観、価値観を指す。現在政権を担う中国共産党にとって政権の安定を確保することが最重要課題となっている。そのため義務教育語文課程の中では自党の正統性と国家建設への貢献を国民に説くための教育が実施されている。中国における義務教育課程の教育内容は政府が決定権を有するが、妥当性を欠いた教育計画を強硬に推し進めれば政権への不信を招きかねない。中国共産党は過去の歴史に拠り所を求めるだけでなく今後の国家建設の見通しと、世界の動きに対応し中国が国際的課題に貢献する事例を国民に示さなければならない局面に立っており、その事情が『語文』にも反映されていることが分かる。

本稿では『語文』の中で戦争と平和に関わる単元について考察してきた。戦争と平和という論題は人間の生死の問題と切り離して考えることは出来ないが、本稿で考察した資料の中で登場人物の戦死に触れる教材は限定的であった。これは『語文』の中に過去の歴史を記憶するための教材とともに平和を

享受する現在の中国を説明する教材が併存することによるが、今回分析対象とした資料の中で戦争のために犠牲となった登場人物について明記されるのは『語文』一年級下冊第23課「王二小」、同四年級下冊第15課「ある中国の子どもの声」、五年級第22課「狼牙山の五人の壮士」の合計3課であった。これら各課の中で「王二小」の主人公で八路軍に協力した少年、「狼牙山の五人の壮士」の中で抗日戦争期晋察冀辺区を舞台とする軍事作戦を敢行する八路軍兵士、「ある中国の子どもの声」の中では一九九〇年代に国連平和維持活動に参加した父親が戦争の犠牲者として描かれている。四年級下冊第14課「小さな英雄雨来」の中では「王二小」同様に晋察冀辺区に暮らす雨来少年が八路軍兵士を助けて日本軍に立ち向かうが、雨来少年は「王二小」と異なり自力で活路を切り開き、抗日戦争の中を生き抜く子どもの姿を示している。このように『語文』所収の教材は、中国が今日の平和を実現するに至るまで、過去の戦争のどの局面で誰がどのように行動したのか全体の構成を考慮して編集されている。

本文で述べたように、戦争と平和に関わる教材は『語文』の各冊に分散し、多様な主題の下に載録されている。本稿では四年級以下と五年級上冊第七単元を対象に考察をおこなったが、『語文』には他にも戦争と平和に関わる教材が載録されている。本稿で扱った『語文』五年級上冊第七単元以降では、同第八単元並びに五年級下冊第四単元に朝鮮戦争、六年級下冊第二単元には国共内戦を背景とする教材が載録されている。これらを含め『語文』の中で戦争と平和を主題とする教材はどのように取り扱われているのか、引きつづき考察を進めたい。

最後に、「正しい世界観、人生観、価値観の形成」は人間の死生観とも言い換えられる。『語文』には戦争以外にも人間の生死を叙述する教材が全編にわたって載録されており、それらの中では病気、貧困、刑死、他者を救済するための自己犠牲による人間の生死等が主題となっている。戦争による生命の犠牲に加え人間の生死を左右する多様な事情を視野に入れて『語文』全体を考察し、語文科目の教材が説く世界観、人生観、価値観に対する考察を今後の課題としたい。

注

- ¹ 中華人民共和国教育部「義務教育語文課程標準（2011年版）」第一部分前言第2段。
- ² 課程教育研究所・小学語文課程教材研究開発中心編著義務教育課程標準実験教科書『語文』一―九年級、各学年上下冊で全18冊（人民教育出版社発行 2001年に一年級第一版発行、以下年次ごとに順次発行）、同『語文 教師教学用書』一―九年級、各学年上下冊で全18冊（人民教育出版社発行 2001年一年級第一版発行、以下年次ごとに順次発行）。
- ³ 拙論「戦争と子ども―中国の語文教科書から」『名古屋外国語大学論集』第1号2017年
- ⁴ 以下、「王二小」並びに『語文』四年級下冊第四単元の内容については、前掲「戦争と子ども―中国の語文教科書から」参照。
- ⁵ 高洪波「孩子与战争-谈《和我们一样享受春天》的创作」『小学語文教学』2005年第5期 68-70頁参照。
- ⁶ 『語文 教師教学用書』（以下、『教師教学用書』）四年級下冊第四組前文70頁。
- ⁷ 『教師教学用書』五年級上冊第七単元前文197頁。
- ⁸ 円明園の焼き討ちは一八五六年広東省珠江に停泊中の船籍アロー号にまつわるイギリスと清国の争いをきっかけとして、一八五八年に英仏連合軍が広東を占領したことによって始まった第二次阿片戦争（アロー戦争とも称する）の戦後処理に不満を募らせた英仏連合軍が北京城内に強硬入城し、一八六〇年十月北京西北に位置する清朝皇帝の離宮円明園を略奪した事件を言う。円明園の建造、アロー号事件から円明園焼き討ち、その後の北京条約締結に至る経緯については、矢野仁一『アロー戦争と円明園―支那外交史とイギリス』（弘文堂1939年、中公文庫から再版1990年）、並木頼寿・井上裕正『中華帝国の危機』（『世界の歴史』19）中央公論社1997年、上田信『中国の歴史9 海と帝国 明清時代』講談社2005年、菊池秀明『中国の歴史10 ラストエンペラーと近代中国 清末中華民国』講談社2005年等参照。
- ⁹ 『語文』五年級上冊第21課「圆明园的毁灭」117頁。
- ¹⁰ 前掲「圆明园的毁灭」115-116頁。
- ¹¹ 『語文』四年級上冊第17課「长城」、第18課「颐和园」、第18課「秦兵马俑」参照。
- ¹² 前掲「圆明园的毁灭」116頁。
- ¹³ 前掲『教師教学用書』五年級上冊第21課「圆明园的毁灭」三、教学建議1. 200頁。
- ¹⁴ 抗日戦争期晋察冀根拠地の状況については、田中仁「日中戦争前期における華北農村と中国共産党―河北省涿源県の『800日』」『中国社会主义文化の研究』（石川禎浩編、京都大学人文科学研究所2010年）参照。
- ¹⁵ 『教師教学用書』五年級上冊第22課「狼牙山五壮士」一、教材解説209頁。
- ¹⁶ 『教師教学用書』五年級上冊第22課「狼牙山五壮士」二、教学目標210頁。
- ¹⁷ 『教師教学用書』五年級上冊第22課「狼牙山五壮士」三、教学建議211頁。
- ¹⁸ 朱徳（一八八六―一九七六）は中国の軍人、革命家。中国同盟会に参加し、辛亥革命を経験。一九二二年孫文との出会いを機に中国共産党入党後は軍事部門を指導し、中国人民解放軍の「建軍の父」と称される。抗日戦争中は八路軍総司令として指揮を執った。中華人民共和国建国後は、国家副主席、国防委員会副主任、全国人民代表大会常務委員会委員長などの要職を歴任し、軍事面の最高指導者と讃えられた。一九五〇年代から『語文』には、朱徳が革命幹部の立場にありながら天秤棒を担いで食料運搬の労働を担おう

とした逸話を主題とする「朱徳の天秤棒」（朱徳的扁担）が掲載されてきたが、二〇〇〇年代以降、この教材は教科書から削除された。

- ¹⁹ 拙稿「中国の小学『語文』の教科書 愛国のための儀礼を支えるキーワード」富谷至編『東アジアにおける儀礼と刑罰』（明文舎印刷）129-170頁2011年参照。
- ²⁰ 『教師教学用書』五年級上冊第23課「难忘的一課」二、教学目標217頁。
- ²¹ 李小雨（1951-2015）は河北省の出身の女性詩人。一九六九年河北省内の農村で下放を経験後、北京大学中文系を卒業し作家活動に入った。一九八三年に中国作家協会に加入し『詩刊』『人民文学』『人民日報』等に作品を発表しつつ『詩刊』の編集に携わった。
- ²² アヘン戦争後1842年南京条約によるイギリスに対する香港割譲とその後の経緯については、坂野正高『近代中国政治外交史』東京大学出版会2001年（第4刷）、若林正丈・谷垣真理子・田中恭子編『原典中国現代史第7巻 台湾・香港・華僑華人』岩波書店1995年、吉川雅之・蔵田徹『エリアスタディーズ142 香港を知るための60章』明石書店2016年等参照。
- ²³ 『語文』五年級上冊第24課「最后一分钟」126頁。
- ²⁴ 『教師教学用書』五年級上冊第24課「最后一分钟」二、教学目標220頁。
- ²⁵ 前掲「最后一分钟」127頁。